

石原敏子先生に贈る言葉

外国語学部長
外国語教育学研究科長
竹内 理

もう先生は覚えておられないかもしれない。今から10数年ほど前に、ふとした機会から、英詩にまつわる議論をさせて頂いたことがあった。いや、議論というと、あまりにも先生に失礼だ。ごく他愛のない話だったといえよう。私は下手の横好きで英詩を読むことがあるが、その中でも John Donne の詩（や、それとは趣の異なる Dylan Thomas の詩）が好きだということをお話した。この時、先生の研究分野の1つが、その Donne を含む英国17世紀の metaphysical poets（形而上詩人）たちとはつゆ知らず、軽くお話をさせて頂いていたのだ。今ならこれは赤面ものである。

その際、どういうことの成り行きだったか、Donne の詩 Canonization の話となり、機知と奇想を特徴とするこの詩の中でも、下の引用にある tapers というコトバのイメージについて、私の解釈を述べさせて頂いた。だが、あまりにもそれが突飛だったのか、微笑まれながら「あなたの解釈も metaphysical ですね」と言われたのを覚えている。浅学な私の解釈を（間違いなく誤りだったと思うが）誤りだと批判せず、やんわりと切り替えして頂いた機知こそが、優しさにあふれた metaphysical な対応であり、先生の人格そのものの発露であったのだと思う。

Call us what you will, we are made such by love;
Call her one, me another fly,
We're tapers too, and at our own cost die,
And we in us find the eagle and the dove.

先生は、米国留学中に始められたアジア系米国女性作家についての研究を展開されたあと、絵本の研究にも入られた。背景には、自らの病床での経験があったとのことである。その後、絵本の研究は大きく花開き、関西大学出版部創立70周年記念講演で一端をご披露になった著書『英米の絵本の窓から』へとつながっていく。

先生は、絵本において大切なものの1つは、読み聞かせの部分だと常々お話されていた。そ

して、これを学部のゼミや大学院の講義などを通して、実践されてこられた。その頃、聴衆があつての読み聞かせということで、「どこか幼稚園や小学校で、英語絵本の読み聞かせを希望されているところはありませんか」と私にお尋ねになったことがあつた。幸い、北摂の市にふさわしい学校があり、紹介させて頂いたのだが、そこでのゼミ生たちの読み聞かせ活動は、非常に評判が高く、「ぜひ来年も続けてもらえるようにお伝え願えますか」と私に伝言されていた学校関係者のことを思い出す。これは、絵本を通して言語に向きあう姿勢を学生の中に育んでこられた先生の、とても大きな成果ではないかと思っている（なお、この活動で学部ゼミ生たちは、2014年度に学部長表彰を受けている）。

校務などに関して、様々に無理なお願いばかりをする私に、いつも「いいですよ」と上品な微笑みを浮かべて対応してくださる先生と、今後、お目にかかる機会が減っていくのは寂しい限りである。そのような思いもあつたので、お断りになられていた定年延長の申請を「ぜひとも提出してください」と繰り返しお願いした。だがその時だけは、いつものように「いいですよ」とはおっしゃらず、「そういつて頂くだけで嬉しいです」と穏やかに応じられていた。「いいですよ」という答えが一番聞きたかつた場面だつたのだが。

石原先生、どうか健康に留意されて、これからも絵本を、そして英詩を、存分に楽しみながらお過ごしください。長い間、ありがとうございました。